

## 桃李門に満つ

北京生活六年目。気が付くと実践に通った年数と同じだけ、中国で暮らしています。思えば私の中国行きの火種となつたのは、守邦先生の近世文学研究の授業で読んだ浅井了意の『伽婢子』でした。この時初めて「翻案」という言葉を知り、急に中国が身近で、興味深いものを感じたのです。大学には中国語学研修制度がありましたが、中国語の授業では発音記号すらろくに読めず、中国の地を踏むことなど考えていなかった私が、その年の春休みには北京の街を歩いていました。

そして現在、北京の大学でお世話になっているのですが、昨年度より勤務先から以下のような成績表を学期末にいただくようになりました。

一、教学態度は真面目で、時間通りに授業時間を行っ

## 矢野 洋子

ている。

二、授業は意欲に満ち、時間を有効利用している。

三、講義内容は充実しており、思考は明晰で、要点が明確である。

四、講義内容はユニークで、理論は実質的で、情報量が多い。

五、独創性ある講義で、学生の授業意欲を高めている。  
六、積極的に学生と交流し、学生の分析力、問題解決能力の育成に留意している。

七、現代教育技術を応用し、生き生きした授業を展開している。

八、真摯に質疑に応じ、丁寧な課題指導を行っている。

九、授業の雰囲気掌握している。

十、教学效果は大きく、得るものは多い。

原文は中国語で、授業毎に学生が各項目五段階で評価し、その比率を元に百点満点で点数が出されます。外国人数員の強みで、私の成績はさほど悪くありませんが、高学年ほど評価は厳しくなります。外国人という隠れ蓑は一年も経てば効果が半減する、と成績を手にする度に身の引き締まる思いがします。

そして今、守邦先生の授業を思う時、この項目をすべて満たしていることに気付きます。

昨年五月、一時帰国の予定があつたので、先生の大学院の授業を聴講する計画を立てました。同期のゼミ生に声を掛けたところ、あつという間に同期総勢十八名の四分の一が集まりました。当日、一人は子どもを実家に預けて駆けつけ、一人は一歳になる双子を連れてご主人の運転でやってきました。二人とも聴講は時間的に難しいけれど、先生に一言ご挨拶をとということでした。校門で再会し、研究室に向かうとしたその時、本館からこちらへ向かってくる守邦先生。守衛さんに用事があつてのことでしたが、そのタイミングの良さに一同大興奮。ゼミ生の抱いていた双子の兄弟にすぐに目を止め、「大きくなつても双子だよ。」と双子の親ならではの言葉をかけられた先生に、私たちは十年前と変わらない独特のおかしみを感じたのでした。

先生の大学院の授業はいつも土曜日の午後です。学籍を離れ仕事を持つても、勉強したくなつたらいつでも来られるように、という配慮の時間割だろうと思います。平日は会社勤めの二人も、その御配慮で今回、授業に参加することができました。授業内容は和本の虫食い直し実習で、先生は豪快にご自身の和本の糸を切り、気前よく院生に配っていました。私たちにもそれぞれくださったのですが、三人で一葉直すのがやつとでした。この記念の品は外国暮らしの特典で私がいただき、北京に戻って文学史の授業で学生に見せびらかしました。

その時に、中国の学生たちが興味を持ったのは本物に触ることのできる授業であり、その授業をする先生であり、その先生のもとに集うゼミというものの存在でした。確かに私の所属する日本語学科にはゼミはありません。中国の大学は時間割が学科で決められ、四年生の前期まで履修科目がいくつもある学校も珍しくありません。ですから卒業論文は後期に入ってから、実質三ヶ月程度で書き上げます。その間、担当教員が卒論指導はしますが、就職活動の合間を縫つての個人指導です。中国ではそのほとんどが国立大学で、少数精鋭ですからクラス二十名弱しか取らず、クラスがゼミに近いのですが、やはり卒論ゼミとは違います。卒業論文という同じ目標に向かって、発表やゼミ合宿で苦

楽を共をした仲間とは、何年経って会っても刺激し合える気がします。

ちょうど一年前、守邦先生ゼミの同期が三名北京に遊びに来てくれました。別々の道を歩んでいる三人が、集合日だけ決めて、別々の飛行機で北京にやってきました。朝から晩まで話をした日もあり、一日中歩き続けた日もあり、夜中にお酒を飲みに行った日もあり、発表こそないもののゼミ合宿のようでした。何年も会っていなかったのが嘘のようで、話題はそれぞれの近況から始まって、学生時代のこと、ゼミのこと、そして卒業論文のこと、守邦先生のことへと行き着くのでした。

書式を守ること。出典を明らかにすること。これは卒論指導で先生が口を酸っぱくしておっしゃっていたことです。発表する度、卒論を見せに行く度、細かくチェックされ、その重要性が骨身に染みしました。そして今、中国の学生たちの卒論指導にこれほど必要なことはないと実感しています。内容の指導に関しては私自身の精進あるのみですが、体裁だけは先生仕込みの指導ができることに感謝しています。

「桃李門に満つ」という言葉がありますが、開け放たれた守邦先生の研究室には、いつも誰かしら学生がいました。ゼミには秀才ばかりが揃ったわけではありませんが、優れ

たところを先生に見つけていただき、丁寧に導いていただきました。今、満天下に散らばる先生の学生たちは、それぞれの場所に立ちながら、時折ふと先生のことを思い出します。そして、その真摯な指導を受けてきたことを振り返り、そんな自分に自信を持つことができるのです。

二〇〇八年は北京でオリンピックが開催されます。以前、先生は北京ダックをお腹いっぱい食べるのが夢だとおっしゃったことがあります。私の夢はオリンピックを肴に、先生を囲んでゼミ生たちと北京ダックで乾杯することです。

(やのようこ・平成十年度本学大学院修士課程修了・北京理工大学常勤講師)